

159 セーブル国立陶磁美術館と日本人芸術家（2023年5月4日）

これまでに何度もセーブル国立陶磁美術館に展示されている日本の陶磁器を取り上げてきました。今回は、日本人芸術家に注目して、この美術館が所蔵する3点の作品をご紹介します。

最初に取り上げるのは、沼田一雅（1873-1954）作の「お菊さん」（写真右）です。大理石のように見えますが、ビスキュイと呼ばれる無釉白磁で作られています。沼田は、日本人として初めてセーブル磁器制作所に滞在して制作を許された人物です。彫刻を学び、1903年に農商務省海外窯業練習生として渡仏し、セーブルで陶磁制作の技法を学びました。フランス留学中は、オーギュスト・ロダンの教えも受けたこともありました。



「お菊さん」というタイトルは、フランス人作家で海軍軍人であったピエール・ロティ（1850-1923）による同名の小説の主人公の名前から取られています。この小説は、ロティが長崎に滞在していた間の日本人女性との恋愛体験を元にした作品で、フランス人作曲家アンドレ・メサンジェによってオペラ化され、1893年にパリで初演されました。この作品は、プッチーニ作曲のオペラ「蝶々夫人」に影響を与えました。



二つ目の作品は、草間彌生（1929-）による「ゴールデン・スピリット」です。世界的に知られた現代美術家が、セーブルのために制作した作品です。実は、この作品も沼田一雅の「お菊さん」と同じくビスキュイによって作られたものです。金メッキで覆うことで黄金に輝いています。とてもインパクトのある作品です。髪を逆なでた一つ目の恐ろしい怪物にも見えれば、真っ赤な手袋とヒールの靴を身につけたお洒落な愛嬌のある人形にも見えます。皆さんには、どのように見えるでしょうか。

最後は、森口邦彦（1941-）によるカップ＆ソーサー「実り」です。森口は、友禅作家で、重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されています。なぜ、染織家の磁器作品がセーブルにあるのでしょうか。セーブル磁器制作所が、日本の伝統技法の技術を持つ森口を招き、森口とセーブルの職人の対話によって新たなセーブル焼の可能性を広げる試みが行われました。森口は、学生時代にフランス留学経験があってフランス語を話しますので、セーブルの職人と直接対話して作品作りを進めました。



「実り」のデザインは、元々は友禅の着物のために考案され、日本の有名デパートのショッピングバッグのデザインに採用されました。森口は、「実り」をコーヒーカップのデザインに取り入れました。画期的なのは、「リトロン」と呼ばれるセーブルの伝統的なデザインのカップ＆ソーサーのソーサーを平らにしたことです。これによって、ソーサーに描かれている模様が、よく見えます。平らなソーサーは、ありそうでなかったものです。日本とフランスの伝統的な工芸品の職人たちによって、両国の伝統と新しさが融合した作品が生まれました。

※美術館の展示は、変更されている場合があります。

[72 南蛮貿易と漆器](#)

[129 パリ万博と日本（その1）](#)

[146 日本の陶磁器](#)